

ルソン島敗残実記

愛媛県 矢野 正美

私は大正九（一九二〇）年、愛媛県で生れ、昭和九（一九三四）年壬生川尋常高等小学校を卒業しました。昭和十六年三月十日、善通寺西部第三十七部隊に入隊した私は、一週間後に坂出港から満州に向いました。北朝鮮の港に着いた時の寒さは今でも忘れ得ません。

そしてソ満国境の町、虎林の外れにある清和鎮の工兵第十一連隊（満州第三五二部隊）に初年兵として入隊しました。厳しい寒さの中での教育は大変なものでしたが、上等兵候補者教育も含めて、何とか一期の検閲は終わることができました。

当時はちょうど日米開戦の半年前の時で世の中は軍国主義の華やかな時代でした。中隊長の三宅中尉は、兵隊上りの軍人精神のかたまりのような方で、私に対して何回も下士官志願をするよう説

得されました。これは小学校しか出てない私にとって軍隊幹部への途は、この下士官志願しかないからでしたが、しかし入隊前から義務年限を務めた上で家へ帰りたいと心に決めていた私は、ひ弱な私の体格（身長一六五センチ、体重五二キロ）を理由に、とても職業軍人には向かないと断り続けました。私の心の中には、それよりも強大な軍の組織や、私的制裁の横行、それに満州の気候の厳しさにはとてもついてゆけないとの思いがあったからです。

その夏、突然、関特演（関東軍特別大演習）が始まりました。大勢の召集兵が入隊し、兵舎の内務班には二階を作るなど、戦時編成が行われました。そして各所に陣地構築をしたり、渡河演習も繰り返し行われました。

かくして、我が国は十二月八日の大東亜戦に突入していったのです。開戦時の南方戦線での大戦果を聞いて胸がおどりと、北の防衛にある自分が口惜しく、早く南方に出動したいと思ったものです。

そして操舟機などの教育を受けていた私達に、中支への出張命令が出たのは年末近くでした。

一週間の列車の旅で、ハルピン、奉天（瀋陽）、天津から濟南、徐洲を経て、揚子江の支流淮河のほとりの淮遠と言う小さな町に宿営して、ここで渡河訓練が行われました。私にとつては何よりも寒い満州から脱出できたことが嬉しく、このまま中支に残りたいとそんな思いの日々でしたが、この演習も二カ月余りで終わり、再度虎林に帰ってきました。

当時、南方の日本軍は各地を占領して戦果を上げ、日本中湧きに湧いていました。そんな折、中隊長は再び私に落下傘部隊への志願をすすめました。この落下傘部隊である高千穂部隊は九州に帰ることになるのですが、どうしても職業軍人にはなれない。今度は高所恐怖症を理由に断りました。しばらくすると今度は憲兵志願を申し入れてくる始末です。私はますますこの生活がいやになりました。そのためかどうか初年兵も同年兵も進級

して行くのに、私にはそれはなかったのですが、内心私は喜んでいました。そして九月になると転属命令が出ました。

新しい部隊を作るために各部隊から一部ずつ兵を集めるのですが、こういう場合は、各部隊はたいてい優秀ならざる兵を出すのですが、私もご多分にもれず、ということ、その一員として指名されましたが、これは原隊からの体のよい追い出しでした。考えれば、当然のようでもありました。

それでも多くの同年兵や、郷土部隊と離れることは淋しく、また見知らぬ部隊に行く不安もありましたが、逆に新しい機甲部隊への期待もあり、満州を出られるかも知れないという希望もあつたのです。しかしこの転属の際の進級もなく、私は一等兵のままでした。

部隊は鉄嶺で編成され、戦車第二師団工兵隊第四中隊に配属が決まりました。そして配属になって驚いたのは、その部隊の主力となつたのが、初戦のマレー作戦で戦功を立てて帰った召集兵ばかり

りで、英軍のシャツ姿で、やる事が荒れており、加えて兵庫、岡山方面の出身者が多く、関西弁の早口でマクシ立て、初年兵の東北出身兵をおどかしているのです、そして戦利品の軽戦車や、フォードの貨車を数十台持っていました。

その他の部隊から転属して来た同年兵の多くは上等兵で、初年兵は中隊に数人しかいないため私は初年兵同様で、飯上げや各所の当番で全く多忙でした。

部隊は勃利に移動して駐屯しました。大平原の中に連隊は掘立小屋のような兵舎を作り、冬に備えて兵舎の半分は土で埋めてあり、そこで新年を迎えました。北滿に遅い春が来ると、初年兵が入って来て、私は三年兵となり、初年兵教育を命ぜられ、詫間上等兵と二人が助手として、素朴な東北出身兵の教育にあたりましたが、詫間上等兵は二年兵、矢野一等兵は三年兵、しかし、階級が上の二年兵が先任です。それでも私は不満なく、来年こそは満期だと心に決めていました。

夏ごろから太平洋方面の戦況が大分おかしくなり、年の瀬の迫るころには我が軍の移動が始まり、そして昭和十九年を迎えました。

春が来ても、私の待ち焦がれていた満期は訪れず、なぜか上等兵に進級しました。戦友の村上も同時に進級しましたので、これはどうやら四年兵の古兵を一掃するための進級であったようです。そんな私には再度保育兵教育の命令があり保育隊に転出する事になりました。内地から大陸に來ると空気が乾いているので、肺を侵されやすいのです。

ツベルクリン反応で陽転した兵を集めて、教練や内務を若干ゆるやかにする。ここには、初年兵ばかりで古兵はいない。また隊員には補充兵の弱兵や、既に三十歳以上の兵も多く、昨年の初年兵とは大違いで、あまり気合は入れられません。保育隊の生活は全く神様の存在でしたが、六月末には検閲も終わり解散となり、私は中隊に復帰しました。

現役四年兵ともなればもう恐いものなし、内務班では何もする事はなく、古兵が集まっては満期の話ばかりです。毎日の演習も何かと週番下士官に文句をつけてスツポかし、教官を怒らせては面白がっていました。炊事当番の兵に命じて米を盗ませて来たり、豚肉を持って来させて料理し、米飯を自炊して食べたりしていました。しかし、戦局はますます悪くなり、満期もないまま、ついに動員令が下りました。

そして満州を後に、昭和十九年八月二日には第五中隊に続いて第二中隊も出発し連隊はいよいよ淋しい感じになりました。我が第四中隊の出發も間近で、連隊本部と一緒に、一度内地に寄港して兵器の受領をして、そこから南方に行くという噂が出ていました。

八月四日、いよいよ出發です。完全軍装をした兵達は雄々しく前後盒（弾入れ）につめた九十発の実包がずしりと重い。九九式小銃に白布を巻く兵、千人針の腹巻きをつけ、寄せ書きの日の丸を

肩からタスキ掛けした兵もいる。私は指揮班で、残留隊が整列して見送りする中を中隊は勃利駅に向いました。

機材の積み込み点検が終わり、五時となり私達が乗車する。七時ごろに貨車はようやく出發しました。未練も何もない満州ではありますが、それでも二年間を過した勃利の街にさよならです。列車が走り出すといくらか涼しくなり、夜に入ると空気も冷えてきました。

かくして我々の部隊を乗せた貨車は朝鮮の平野を走り、八月八日、釜山港に到着、十一日に乗船となりました。戦車部隊は危険をさけて一個中隊ずつ別々の船に乗船するそうです。そしてもうここでは私達がフィリピンに行くという事は公然の話となり、誰もがそう思っていました。

十一日の日暮になって、いよいよ乗船で「永治丸」には連隊本部が同乗しました。輸送司令官は第八師団の歩兵連隊長で、船倉は何段にも仕切られて、船底には軍馬が乗せられ、下部の何段かは

兵器や弾薬、糧秣等がビッシリと積まれ、上部の三段ぐらゐは居住区となっています。十二日の夜明けには「永治丸」はあちこち停泊中の軍用船の間をぬって、門司港外に投錨しました。

八月十六日、目をさますと、六隻の船団は海軍に護衛され、玄界灘を西に向って走っていました。船団の先頭は三本煙突の旧型巡洋艦で、左右には二隻ずつ駆潜艇が、後方には駆逐艦がついています。船団は八ノットぐらゐでジグザグの航海です。

洋上では敵潜に備えての演習が行われましたが、実際に敵潜に追尾されているので、船団は航路を上海沖から大陸の沿岸沿いに台湾に行くことに変更して鹿児島に入港するというので、八月二十日「永治丸」は桜島の近くに投錨しました。二十五日ようやく抜錨し出向しましたが、二十六日基隆港へ向う間に「第三吉田丸」が敵潜により轟沈、第六中隊の乗った「福永丸」も大きな爆発音と共に真赤な尖光を放っていました。基隆の街は雨で煙っていました。二十九日夕、基隆を出発した

船団は台湾の西海岸を南下して、三十一日朝、高雄港外に仮泊しました。

この調子で行くとフィリピンに到着するのは何日になるのだろう。満州を出てから一カ月である。寝られぬままにしていると空襲警報が鳴り高雄の街が真暗になります。沖の方から軍艦のサーチライトが照らされ、あちこちの山からも空を照らす。海上の艦艇や周囲の山々の高射砲陣地より、一斉に対空砲の火ぶたが切られます。偵察なのか、敵機は一発も見舞わずに去りました。

九月六日、「永治丸」は動き出し、私達はようやく涼しくなり、ぐっすり寝込んでいた時、ドカんと大きな爆発音と共に強い衝撃が走りました。やられたと直感すると直ちに装具をつけたのです。退船ラッパは鳴らない。その時、再びドカンとブリッジのあたりに火柱が立ちパラパラと火の粉が降って来ました。兵はなだれのように海に飛び込んで行く。船はまだ全部沈んでいない。その時、三度目の爆発が起り「危ない」そう思いながらも

私はハッチ板を見付けて、それを浮かせて離船しました。

本船は船尾を残して逆立ちの形になり、船首が没した「永治丸」の後部には火が入り燃えている。

私が船から百メートルばかり離れた時、最後の爆発を起こして本船は完全に沈没しました。

先に飛び込んだ兵隊は四、五百メートルも先を流れて行く。私は遅れてただ一人漂流していたので、ようやく駆潜艇に助けられたのは八時ごろでした。約四時間海の中にいたので寒い。夜が明け切ってみると陸地は意外に近いようである。高雄に上陸して我々は暁部隊の高雄宿舎に収容されました。

九月十二日、再度乗船が決まり、三八式の兵器などが支給されました。今回の船は「白根山丸」である。かくして十五日夜半に高雄を出港、バシー海峽は静かだったが、うねっていました。

船中は駆潜艇だけで護衛されている。独特の黒い雲が襲って来た、スコールである。このスコール

ルが焼けた甲板を洗うと一度に涼しくなる。十七日、東の空が白み始めるころ、大きな爆発音で飛び起きました。「淡路丸」が轟沈で、どの方向なのか朝霧で分からない。そして全速で走る本船の右舷側には「みずほ丸」が並んで走っていました。

日の出と共に空は晴れてきました。私が朝食の分配を始めたとき、この「みずほ丸」の船首に魚雷が命中しました。第三発目が船の中央に命中、大きな爆発と火柱が立ち、「みずほ丸」の船上から兵が雪崩を打って海に飛び込むが見えます。その時ラッパと共にブリッジからスルスルと日の丸が揚がりました。悲壮な光景です。やがて「みずほ丸」はズボツと海中に姿を消しました。約五分間の出来事で、私は本船の最後部甲板に上がり、敵潜の警戒につきましたが、今度は本船の番だと思おうと緊張の見張り役でした。

その時、本船の右舷後方よりの魚雷を見ました。船尾が右にふれ、その魚雷は岸の方向に通り過ぎましたが、今度は右舷正面より白銀の矢のように

迫つて来ます。今度もわずかに本船の後に外れま
した。

程なく危険水域を脱した本船は、ラオアグの入
江に投錨し、ここで「白根山丸」は兵員を上陸さ
せ、「永万丸」も入港して来ました。マニラにはま
だ二日はかかるという。

十八日、朝から小雨の中、部隊は陸路行軍で目
的地に向かうという。私は病み上がりで給与係と
いう事で藤原准尉外五人と共に当地に残留、明晩、
機帆船で北サンフェルナンドに向かい、糧秣その
他のものを受領することになりましたが、中隊長
以下の本隊は一日中降り続く小雨の中を行軍に入
りました。

フィリピン戦線

勃利を出発してから五十五日の九月二十八日、
私達は目的地ガバンの町に到着しました。思えば
長い戦いの道程であつた。うだるような列車の旅、
潜水艦に追われる長い航海、その間に幾多の僚船
を爆沈され、私達も海没を経験しました。幾千の

戦友達が南シナ海やバシー海峡に沈んで逝くので
す。

そしてフィリピン滞在が続きましたが、十一月
末ころになると戦雲がヒシヒシと身に迫るよう
になり、米軍の上陸近しが現実味を帯びてきました。
そして毎日のようにマニラ方面から移動して行く
人が多くなり、重苦しい灰色の日々が続きました。
そしてとうとう一月八日、米軍はリングエン湾
に上陸を開始しました。我が戦車第二師団も出動
である。武器、弾薬、食糧の分配と積み込みが、
日夕点呼なしで終了しました。

一月九日、出動命令が下りました。予期してい
た事でしたが、いざとなると身の引き締る思いで
した。発表されるニュースは友軍の大勝利、野戦
部隊は敵を水際に追い返し、我が空軍は敵船団に
大被害を与え、リングエンの沖に敵影なしの大戦
果だという。

関東軍の精鋭といわれる我が部隊もいつときも
早く戦列に入りたい。しかし今日も米軍の戦爆連

合の大編隊が西に向かうが、友軍の迎撃はない。八時、中隊は十数両の車に分乗して出発、連隊本部と合流、他の部隊の移動も多く、我々の車は動いては止まり、また動くという状態で、何だか気の入りぬ行軍です。

こうして十一日、ムニウスという町に入りました。遠くで遠雷のように砲声が聞こえ始め、戦場が近づいて来ました。戦車第三旅団がビナロナン付近でお手柄を立てたというニュースが入り、我が隊の志気もますます盛り上がりました。西の空があかね色に染まるころ、爆音が聞える。友軍機だということで誰もが空を仰ぐと、日の丸をつけた戦闘機が尾部に煙を噴きながら低空を南に向かつて飛んで行きます。私達の期待は外れました。四航軍や六航軍はいつになつたらその力を活かす事ができるだろうかと思うばかりでした。

翌十二日、サンホセという小さな町の中を走っていますと時々砲声が聞こえ、二、三時間後下車して、道路から外れて車両を隠しました。第一小隊

が別動隊となるので、私達の貨車と第一小隊の装甲兵車を取り替えました。昼過ぎ山ぞいにノースアメリカン数機が五百キロ爆弾の雨を降らせ、その爆撃が終わると、今度は機銃掃射です。付近はもうもうと砂煙が立ち何も見えない状態です。

十三日、第一小隊は戦車に配属となり、中隊はタユグ方向に出発する。田圃道を抜けると、小さな村の入口でロッキードの残骸があります。兵達は声を上げて嘲笑するのですが、小気味のよいものでした。私達の目の届かぬ所では、友軍機も戦果を上げているのだろうと、何だか勇気が湧く思いでした。

程なくサンクインテンという所に到着しましたが、前方からは砲声が響いており、機関銃の音も聞こえ、いよいよ戦地へ入った感じでした。町には一人の住民もいません。

十四日、中隊は夜のうちにタユグの町に入り準備しました。ここではタユグに侵入する敵の戦車を迎え撃つために、タコツポに入り、肉弾攻撃の

予定でした。そして米軍がリンガエン湾に上陸した一月八日より約一カ月、米軍の進撃は止まらず、バレテ峠へ近づいてきました。

部隊は二月五日にこのバレテ峠を越しましたが、このバレテ峠では鉄兵団（第十師団）が守備についていました。我が部隊は砲弾や爆撃で破壊された道路の修理をしながらの敗走で、車の上から見る山道は曲りくねり、樹木に覆われた細い道は車を通るのには精いっぱいでした。前を行く車の前灯や後尾灯がホタルが飛ぶように交わって、ようやく長い峠を抜けてサンタフェに到着、空襲をさけて川岸のさげ目に宿営することになりました。

サンタフェは蚊が多く、とくに北部山岳地帯はマラリア蚊の多い所と聞いていましたが、防除の方法も何ありません。

二月六日の夜の明けないうちに、第二小隊は斉藤曹長以下三人の戦死者を連れて帰ってきました。バレテ峠の道路補修中、敵の二四榴でやられたのです。敵の狙いは正確にバレテの道路を射ち、私

達はその砲撃をさけるため、一段高い山の地際に入ることにしました。第二小隊は夜になると再び道路修理に出掛け、残留の人員で戦死者の右手首を切り落として焼くことにしました。枯木を集めて焼くのに三時間はかかりました。満州出発の折、百二十四人のいた中隊はもう四割を失って、戦車はなく、装甲兵車とトラックを合わせて六台だけとなってしまいました。

二月九日、サンタフェに砲弾が落下し始めたため盆地のようなアリタオに入りました。ここはマングー等の森の多い町で、日中歩いても目立たないようで空襲も来ないところでした。久し振りに森の中を歩き、果物を探し歩きました。そして夜になって第二小隊も追及して来ました。私達のいる上流の谷間に水牛がいるとの報告があつて、一個分隊を指揮、微発に行きました。戦車第二師団は、敵上陸以来の戦闘で大損害を受け、その主力の戦車のほとんどを失い、戦車師団の機能を失い、我が中隊も半数になっていました。

師団はアリタオ付近に分散、集結して休養し、再編成することとなり、十二日、中隊はイナバに入りました。イナバは森と林の続く小さな丘の麓にあり、十メートル幅の川が流れ、数十戸の家が点在しており、住民達もいて、まだ平和な様子でした。各小隊は森の中に分散して、天幕で宿営地を整えました。

日中でも空襲が来ないので兵は平気で歩き回っています。私は炊事場を小川のほとりに築いて、久し振りに中隊炊事を再開しました。川岸にドラム缶風呂を作り、ドラム缶風呂で温まり、川の中に入って身体を洗い。ガパンを出発して以来一カ月の戦塵を川に流しました。これも束の間の平和でした。十四日ころ、村上に師団本部付の命令が出ました。本部で醬油作りをするとのこと。軍は余程長期戦のつもりらしい。

三月十三日、ついに追及命令が来ました。樫村軍曹以下私を入れて八人、六頭の比島馬に食糧を乗せて行くことになったのですが、思えば平和な

半月間でした。また私のマラリアは五、六日目からはよくなり発熱もせず、頭痛がする程度に回復していました。

三月四日には中隊がサクラサク峠に守陣したという報告あり、戦友達の戦いが偲ばれました。そして翌十四日、吉岡曹長以下の残留組と別れて、日の昇らぬうちにイナバを出発しました。樫村軍曹が先頭に私が最後尾につき、砂漠に行く隊商のような行列でしたが、これがかつては勇ましい機甲部隊の勇士達とは大きな様変わりでしたが、兵隊達の志気は旺盛で、足の悪い北村以外は皆元気でした。

日中は暑く、また敵機を警戒して、朝と夕方だけの行軍でした。こうして三日がかりで追及の樫村分隊はイムガンに到着しましたが、ここに来ると兵の往来が激しく、砲声や機銃の音も聞こえ始め、空襲を極度に警戒せねばならない状態でした。この辺りに連隊本部があり、近くで丸山中隊が陣地構築中だそうである。樫村軍曹は丸山隊の出

身です。満州出發以來、あの「永万丸」に乗船して来た隊です。部隊はまだルソン島での敗残の記録が続きました。

【解説】

体験記執筆者は昭和十六年、現役兵として工兵第十一連隊に入隊、昭和十七年八月、編成された戦車第二師団（師団長・岩仲義治中将）の師団工兵隊（隊長・固武辰丙少佐）に転属した。

同師団は昭和十九年八月、駐屯地・満州の勃利を出発、フィリピン・ルソン島に移動したが、昭和二十年一月八日に米軍は比島反抗のためリングエン湾に上陸する。この直前の戦車第二師団の人員は約八千四百人、うち戦車第二師団工兵隊の人員は約八百人であった、という。

戦車第二師団は、撃第一二〇九一部隊と称され、その編成は、戦車第六連隊、同第七連隊、同第十連隊、それに機動歩兵第一連隊、同第二連隊を主力に、師団直轄部隊として師団防空隊、師団速射

砲隊、師団工兵隊、師団整備隊、師団通信隊、師団輜重隊、師団患者收容隊、さらに特設第十一機関砲隊、第四十九野戦道路路隊、独立自動車第六十二大隊などの部隊から編成され、フィリピン派遣では南方軍第十四方面軍の隷下にあつた。

執筆者の所属した師団工兵隊は撃第一二〇五部隊と呼称されていた。

執筆者が戦車第二師団に転属する以前は、工兵第十一連隊は第十一師団（錦部隊）の編成下であり、満州第三五二部隊・錦第二四七五部隊と呼称されていた。

執筆者はこの工兵隊で初年兵教育を受け、満期除隊を望みながらも、大東亜戦争の開始により南方に展開した戦車部隊の一員として比島に派遣されている。

満州駐屯中は関東軍のいわゆる関特連を体験しているが、昭和十七年八月、戦車第二師団に配属された後一年にして満州を発ち、僚船が轟沈されるといふ戦争と運命のはかなさを体験しつつ、九

月十七日、ようやくにして乗船、ラオアグの入江に投錨できたという。

ここより部隊は陸路で目的地へ向かう中、執筆者は病み上がりと給与係ということで機帆船で北サンフェルナンドに到着したのが九月二十日、満州を出て約一カ月半を要している。

米軍反攻必至と言われた中で、戦車第二師団はルソン島駐屯をしていたが、昭和二十年一月八日、米軍のリンガエン湾上陸に対応して出動、一月二十八日、ルソン島サンマニエル付近の未明の戦車で、戦車第二師団重見支隊が総攻撃をかけて全滅、戦車第三支隊長重見伊三雄少将も搭乗の戦車を爆砕され戦死したとされている。

米軍上陸後、ルソンでの戦闘が行われたのは、米軍上陸の一月九日から平地の戦闘が終わる二月十五日までと言われる。米軍が上陸すると、戦車第二師団は全戦車約二百両を投入して迎撃に向かったが、二月上旬までにほとんどの戦車と火炮を失った。その損害は戦車の九割、速射砲の全部、

人員約二千人を失っている。

この平地の戦闘においては、戦車第二師団は、米軍には全く対戦闘能力を發揮できず、壊滅的打撃を受け戦闘能力を失ってしまった。

この平地での戦闘後が、執筆者の記録する『ルソン敗残実記』である。

そしてその中で、戦闘に従事させられた兵士の置かれた境遇・体験が、いかに苦しいものであったかを記している。その後の敗戦、山中の彷徨、収容所での生活は、別に記録したい、と。